

思ひの儘の記 勢多章甫

用捨箱 柳亭種彦

向岡閑話 大田南畝

撈海一得 鈴木煥卿

松陰隨筆 鈴木基之

楓の落葉 信濃漫錄 荒木田久老

13

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第一期 第七卷
昭和二年十月廿八日發行
編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表 早川純三郎
発行者 吉川半七
発行所 日本隨筆大成刊行会



日本隨筆大成

〈第一期〉13

昭和五十年十一月十五日 印刷
昭和五十年十二月一日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五二（代表）
振替口座東京二四四番

製作 株式會社 たんちょう社

解題

本書には、思ひの儘の記、用捨箱、向岡閑話、撈海一得、松陰隨筆、楓の落葉信濃漫録の六種を収める。

思ひの儘の記 四卷

勢多^{せだ}章甫^{ちやうぶ} 著

本書は、禁中の故実に精通している著者の見聞隨筆だけあって、他所には一寸見られぬ記事も多く、殊に光格、仁孝、孝明三朝の事蹟に関しては、本書によって、他の史料を見直す必要のある事をも感じるものである。当時の武家と公家との関係など、幕末は何と云っても、武家中心に物が見られがちであるが、此の書では一応宮庭、公家の目で見える姿がここに展開されている。殊に孝明天皇や、和宮御降嫁等の記事は、著者の見聞で、世の雑音の這入らない記事として珍重してよからうかと思う。幕末隨筆中にも、本書の如き宮庭隨筆と云うものは数少ないもので。私共初め後世の多くの人々に当時の宮庭について、眼を開かせるものがあると思う。本書は著者自筆本が宮内庁書陵部にあつて旧『日本隨筆大成』第一期第七卷に収められ、活字本として流布されたのである。本大成再刊に當つても亦書陵部の許可を得て、自筆本によつて校合を行った。思ひの儘の記は裏表紙にある書名で、書陵部本としては「勢多章甫記」とある。今は旧大成本の書名に従つて「思ひの儘の記」に従つた。勢多章甫 姓は中原、近江勢多郡を食んでいたので、氏を勢多と称したという。家は検非違使、明法博士、大判事を襲職した名家で、明法博士成道二十八世の裔孫が章武で、その子が章甫である。章

甫も天保七年左衛門大志に任じ、主馬首を兼任し、従五位下に叙せられ、左衛門少尉等を経て、嘉永四年には豊前守となり、彈正少忠、彈正大忠等を歴任した。安政四年には執次役を兼ね、明法博士大判事に任じ、左衛門の大尉に進んだ。明治維新後は従四位下に累進、皇学所、大学校、宮内省等を歴任した。人と為り温厚篤実で、有職故実に精通した。著書は本書の外に、先朝紀略、嘉永年中行事、同考証、宮殿並調度沿革、宮殿鋪設沿革、装束沿革稿、廷尉装束抄、女官衣服沿革、御服沿革、御服喪例、同考証、御喪服沿革、御直書類例、服暇掌中抄等がありと云う。明治二十七年十二月八日京都客舎に歿した。行年六十四。この略伝は旧大成本所収の男勢多章之の稿によって認めた。

用 捨 箱 三卷

柳亭種彦 著

本書は『還魂紙料』に次ぐ種彦の考証隨筆で、書名は、「……雨の日の徒然軒の雪のほし／＼と、拾ひ書したる反故なり。若ひとつふたつも取所有ばとり、あとはかいやり給へとて、用捨箱」と、自序に出るによる。内容は巻頭の「草紙の読初」（女子は文正草紙を読む）の項より初まり、下之巻の末「袖頭巾」（一名御高祖頭巾）に至る四十九項更に二条の追考がある。何れも『還魂紙料』と同調、近古の風俗、調度、飲食、俗諺等の考証で、今にしては私共の手軽に見られぬ古版本、古俳書等を用、図版等をも添えて、誰にも親しみよいように配慮がしてある。然も其は決して、他に博識を誇らんとするような気分は全く無く、著者其の人も考証癖を読者と共に喜んでいようである。今一例として上之巻の「御事始」の条を注意して見ると、これは十二月八日は事納め、二月八日は事始で、事とは食事の事で、僧の非時の事がもとであると詳密に考証が為されている。而して種彦は最後の追考にまた、『著聞集』の飲食の部からお事追考を書いている。この御事の事、私は東京育ちであるが、こ

の著者の云うように、十二月八日と二月八日に「お事汁」を食べて育った。小豆入の野菜豆腐などの這入った汁であった。然し何故十二月八日が事納で二月八日が御事始めであるかは本書によって、やっと諾かれた事である。私の家内は富山生れであるが、此がまたお事汁を時々作った。然し此は日を定めず「いとこ煮」と云っていた。富山は仏教の盛な所である。一寸富山の親戚に聞いて見たら、もう終戦後の物資不足の頃に無くなってしまったらうとの事。永い間の行事である。どこかに残して置きたいものである。さて水谷不倒著『列伝牀小説史』下、種彦の条を見ると、

「用捨箱（上中下三冊天保十二年の印行）は種彦が歿する前一年の著、初版には初めに柳亭種彦と記名し、表紙の副葉には柳亭種彦隨筆、東都書房青雲堂、連玉堂合梓とありしを、其の後これを刪落せり。おもふに種彦罪を得しかば、書肆等連累の咎を蒙らんかと恐れて、かくは計りしものなるべしといふ」とある。本書再刊に当っては、国会図書館蔵本、内閣文庫蔵本の天保十三年刊本を照合に用いた。本書は刊本としても諸所の図書館に蔵されて多くの学者を利しているが、活字本としては『温知叢書』二、『日本隨筆全集』十、旧刊『日本隨筆大成』一期七、『有朋堂文庫』等にも収められて流布している。

柳亭種彦の略伝は本大成二期十四卷『足薪翁記』の解題の条を見られたい。

向岡閑話 三卷

大田南畝 著

本書は、著者が玉川治水視察の余暇に見聞した市井の雑録をまとめたものである。文化五年頃は南畝は勘定所に勤めていたが、その暮になって、玉川治水視察の命が下った。依って六十歳の老軀を以て、十二月十七日には野羽織半天に股引と云う姿で六郷を越え八幡塚村に至り、名主に案内せしめて

堤の崩れた処を調査した。此を手初めとして翌文化六年四月三日小石川の自宅に帰ったのであるが、其の間百有六日、治水視察の余暇に其の趣味性を培って、寸暇を利用して市井の雑事、旧家の文書、寺院宝蔵の古記異聞等を書き留めたものが、玉川砂利、向岡閑話、玉川余波、玉川坡砂、調布日記等一連の隨筆である。何れも文化六年に成っている。本書には著者の忙中有閑、閑中有忙云々の自序と、佐々木真彦（花禅、海棠園など号す。石野広道二男、冷泉家門人。文政四年十月二十八日歿）や、印南野樵（犬塚遜、退翁、印南と称した。姫路の人、昌平志の著あり。文化十年病歿）の跋があり。何れもこれらの大著が如何にして著者の超人的努力によって成されたかを驚嘆している。然も著者は先年の長崎出張の時より自ら其の身体の衰えを感じているのである。文人としての蜀山人は然し此の時分既に、自らの為すべき事は一応成し得たとの安定感を得ていたと、玉林晴朗氏は陳べておられる。本書は著者のこの好む所を努むる事によって、この玉川沿岸の諸地方の地誌、郷土史の研究によき恩恵を残された事である。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵、国会図書館蔵の写本を以て校合を行った。国会図書館本には「安政丁巳七月廿四日筆をとりて、八月四日写畢、敬同記」とあつて墨付百四十丁「福田文庫」の蔵印記がある。この「福田文庫」の印は時々見る印で、幕府味噌御用商人で、四谷に住み好事家であつたと云う。敬同の外に「槐尚軒」と云う印記も見かける。私の手控を見たら、

輿車図考^{六卷}
松平定信撰 写本に、敬同「槐尚軒」源氏（山名義理三十二代目）

職原述而鈔拾冊^{天明五年季冬中院}
武陽西隱士平田九郎撰 慶応元乙丑年十二月四日收得之、此本珍書也、源敬同「槐尚軒」

と云う記事がある。

岩波書店の『国書総目録』には著者自筆本が天理図書館にありと見えているが、今はそこまで手展す暇がなかった。活字本としては、『新百家説林』三、本大成本一期七巻に依つて流布した。

大田南畝に関しては、本大成二期二卷『仮名世説』の解題に略記したから同書を見られたい。

撈海^{ろうかい} 一得 二卷

鈴木^{すずき} 澶洲^{せんしゅう} 著

本書は、家に和漢の書を蔵し、平生読書を好み備忘のため涉獵注記する事三十年、その成果によって成った随筆である。著者澶洲は篠崎東海の門人で徂徠の学を尊奉する学者である。内容も上下合せて百二十四則、「人名ノ吉凶」から、「唐詩句解」に終っている。和漢の書物、風俗史上其の他益を受ける事が多い。巻頭に関松窓（井上蘭台門人、享和元年歿、年七十六）の明和八年の序と、同年の著書の序がある。本書は世に迎えられた所が多かったのであろう。『漫画随筆』と改名して後印のものがある。撈海も漫画の語も何れも自序にある詞を採ったもので、何れも海に魚を取る意を現わしている。『漫画随筆』は刊記に見られるように嘉永二年の刊行である。而して本も二巻四冊になっている。出版書肆に多少異同があるが、「下谷池之端仲町 須原屋伊八」は、両本に名を連ねているから、此が主とした書肆であろう。

本書の刊本は諸所に多いが、本書再刊に当っては、内閣文庫本『撈海一得』及び国会図書館本『漫画随筆』を以て校正を行った。活字本としては『随筆文学選集』十二及び本大成本旧刊一期七巻によって流布している。

鈴木澶洲 鈴木を自ら修して木ともする。江戸の儒者で、名は吉明、また嘉蔵、字は煥卿、また子煥、澶洲と号した。初め篠崎東海に従学し、徂徠の説を尊奉して博洽を以て当時世に聞えた。安永五年六月一日歿した。享年六十一。安永元年版儒林医評林、浪華烏有之撰に。

上上吉

鈴木嘉蔵

名嘉章
号澶洲

字煥卿

〔頭取〕御著述も色々御座れど、出版いたしませぬ。才子ゆへ追付名がたましよ〔森銑三著作集〕第十卷所収〕

当時の評判も右によつて知られる。

松陰随筆 一卷

鈴木基之著

本書は、小山田与清の門人である著者の筆のすざびである。本書に序文を草している林惟重、赤松知則、峯尾数台など皆、松屋小山田与清の門人で、著者と同門の雅友と思われるが、私は今其の人を明かにする事が出来ない。早稲田大学の図書館には、松屋升堂名簿があつた事を思い出し、同図書館を煩わし一覽を願つたのであるが、同書は文政三年二月至弘化二年十一月までの記録で、本書に見える諸家の記録は見えなかつた。内容は道興准后の「廻国雜記」を引用して蓑笠の杜の事を記するに初まつて、高田与清の「擁書類函」に及ぶ二十条で、当時の国学者大石千引、屋代弘賢、其の他の人々の説をも引用、歌道歌話を語るものが多い。本書の第七、第八話は、岸本由豆流に関する評話であるが、例の幕末の歌人同士の小競合の一端を見るような所もあつて、一寸暗然とする。元来基之は岸本由豆流の食客であり、後に与清の塾生ともなつた事が「竹斎手簡」(小出翠庵著)の中に見える。与清の蔵書の事も見えるので、少々長くなるが、引用して見ると、

高田与清高堂(小宮山楓軒)へ参上、御閑話御座候由、蔵書は二万巻程も御座候由、奇書は追々御借寄せ被成候様御約束御座候由、御楽に御座候。同人も村田春海方にて度々出会仕候義に御座候共、少々憚り候義有て、名乗合に不申候間、人物は存じ不申、追而申上候哉にも奉存候。右塾生鈴木基之去年より去春にかけ、度々茅屋へも罷越候。

草録集
上木之事ニ付

噂にも、漢国の書は格別之事に無御

座候へ共、和書にて大概不自無之由……

高田与清之事申上候処、同様に申上候仁も御座候由、富士講之義は、同人塾生鈴木基之ト真俗人、内々罷越一宿為仕候物語にて、富士講者には無御座候へ共、右講中ニ入、彫刻物等の世話仕、其儀を以て自分著述之和書等も配り申候而皆利を刺り候よりの手段に御座候旨基之申聞候、九月下旬……

とある。この「竹斎手簡」の記事と本書中の岸本由豆流の記事を見ると、当時の文壇の裏の姿を窺いたような気がして、心の重くなるのは私ばかりではあるまい。

鈴木基之 号を松陰廬と云ったと云うばかりで其の人を明らかにしない。この松陰隨筆の刊記の前に本屋の蔵版目録があつて、高田与清の著書其の他が多くある中に本書も出ている。而して本書に序を草している蘭室赤松知則大人著「蘭室瑣言」一などと云うのも見える。林惟重其の他幾人かの基之の友人の名も見えるが与清の門人と云うばかりで、皆其の人を詳にし得ない。

槻之落葉信濃漫録

一卷

荒木田久老 著

著者は本書の巻頭に、

享和元年九月信濃の国に下りけるに、神奈月、善光寺にていたく煩ひけるをりしも、同学本居宣長の身うせけるよし聞て、いよ／＼こゝろぼそうおぼえければ、いのち全幸マサキくて本郷ホノに帰りなむ事を、天神地祇アツカミツカミに乞禱ゴヒノイマツ奉りて、

天地の神もうづのへわれならばたれかとかむよあたら古語

と自信の程をあらわしている。久老は明和二年十二月に縣門に名を連ねている。宣長は宝暦十四年正

月に縣門に入つた先輩である。宣長の篤実な学風は後世大いに風靡して、古学の徒中にはこれに従うものが多くなつた。然し久老は宣長を尊重し乍らも、又別に自説を陳べて一家を成していた。藤井高尚の消息に、

宇治五十槻^{イヅキ} 外宮の社家麻口大夫 此先生は橋本肥後守が師なり。肥後守書状を以参り候て万葉の事など承候。賀茂真淵の弟子にて本居翁同門たり。真淵の門人も今は多、本居の門に人人御座候へ共、此人は一見識にて宣長は神道くさしとて被嫌申候、面白御説御座候。万葉集中の事は折ふし以書相談いたし候、約し帰り申候。

とある。本書も「莫囂円隣の歌の訓」以下四十二項、門人の問うままに、万葉集中の難解の詞の解を説いたものが多い。本書は一名を「病床漫録」とも云う。文化元年の名古屋の儒家秦鼎の序及び文政四年の彦根の人大堀正輔の序を、更に跋文と頭注を男久守が附して、刊行された。

本書再刊に当つては、旧刊本と同様刊本を用い、国会図書館本及び内閣本によつて校正を行った。

本書は刊本の外に写本でも伝わつたようで、静嘉堂文庫には「不忍文庫」^{「色川三蔵」}の印記のある写本が伝えられている。これには宣長門人の石塚竜鷹の「病床漫録弁」なる一文が附してある。今その初めの部分を抄記して見ると、

荒木田久老神主のあらはせる病床漫録といふものを見るに、我故本居の翁の説をみたりにあげつろへる事とおほかる中に、み過しがたきふし／＼をいさゝかづゝ弁ず。凡て此書後世の詞に古代のふりもましり、辞の詞はさる処もありてつたなけれど、そは此弁に用なき事なれば皆もらしつ

以下十五枚あつて、

文化五年辰五月

石塚竜磨

同七年八月広津主のもてる本を借得てうつしつ。

松島志解岡

かく伝写もせられ、諸家の書庫にも収められた事である。

荒木田久老^{ひきおい} 外宮権禰宜橋村正身^{マサノブ}の二男で、延享三年十一月二十一日に生れた。通称は宇治主税、名は正薰^{ノブ}、正恭^{マサユス}、初め弥三郎と称した。初め外祖父秀世の嗣子となり、権禰宜職を承ぎ主殿と云ったが、後故あって離縁し、荒木田久世の嗣となり、名を久老と改め内宮権禰宜に補せられ、五十槻園と号した。兄橋村正令^{マサノブ}（号痴亭）が伊藤東涯の門に学ぶに及んで、久老は賀茂真淵の門に入り国史律令歌文を学び、縣門中本居宣長と共にその双壁と称せらるるに至った。性豪放不羈で世の毀誉褒貶を意とせず、紅樓宴遊の間にも、先人未発の考を得ては稿を進めたと云う。只文書のみに没頭汲々たるの徒を死学也と嘲笑したと云われている。万葉集の研究には一代の精力を傾倒した。著書は『万葉考概落葉』三冊其の他多いが、本書なども真淵の『万葉考』に次ぐものとして、また万葉集卷三の研究書として、多くの研究者を利している。常に四方に遊んで学徒を聚めて古典の講説をし、従い学ぶものが多かった。文化元年八月十四日病歿した。享年五十九、荒木田久老に就いての研究は多くの人々によってなされている。今は『荒木田久老歌文集並伝記』（神宮司庁編）の一書を挙げておく。詳しくは法政大学文学部史学研究室編『日本人物文献目録』等を一覧願いたい。

目次

思ひの儘の記	一
用捨箱	一七
向岡閑話	三五
撈海一得	三五
松陰隨筆	三三
槻の落葉信濃漫録	四一

思乃儘の記

思ひの儘の記 卷一

勢多章甫 著

○孝明帝の親王にて御年八つの秋、御庭にて御遊びあり。紅葉の比なれば、女官の御歌を遊ばされ候やう申上候へば、暫く御思案ありて、「紅葉はは時雨に染てうつくしひ嵐と共にひろふなりけり、」と遊ばさるゝとぞ。

○或年の節会の日、白髪の人老が殿上人の装束にて、殿上のあたりを徘徊ありしに、若き殿上人などは、誰ならむ見ず知らぬ人なりと思ひしに、光格上皇の、節会の様を御覧の為に御幸ありて、臣下の衣服に召替られ、清涼殿の辺を御ありきありしとぞ。

○光格帝の仰には、元日は四方拝をはじめにて、終日様々の御式もあれば、御草臥にて節会には出御あるまじきと仰られしとぞ。夫より歴朝多く元日の節会には出御はなかりき。

○天正の比、節会の日に行事官〔割註〕山口氏。参勤に、白無垢の小袖なれば、十帖〔割註〕紙の名也。を衿に巻き、其上に装束を着たり。公事の度ごとに紙を取替たり。堂上はじめ大きにうらやみたり。行事官の娘は、代々長女内侍所刀自の一蔵にて、十帖などは沢山ありて、夫を里許へ送りしとぞ。

○仁孝帝は、若年の堂上の無学にて、折々心得違のあるものゝ出来るを御歎息あらせられ、御児などは御用閑には必讀書すべしと厚き御沙汰ありしとぞ。学校の事を度々幕府へ仰立られ、漸く御請になり、未だ建築にならざる先に崩御なりたり。孝明の朝に、漸く鹿材を以て日御門前に講堂を造営せらる。学習

院と名付られたり。

○仁孝帝、兼て仙洞へ朝覲行幸の事を関東へ仰立らる。此朝覲は数百年中絶の事にてあれども、関東御請になりしが、其叡慮を遂させられぬ内に上皇崩御なりたり。御諡号の事御沙汰により、歴朝院号の定なれども、此時に天皇号を御再興なりたり。

○仁孝帝は、例月数回国史と漢籍の御会読あり。欠席せざる人には御褒美を賜ふ。御画を遊ばし、多く蘭の図を書給ふ。又印籠を御好にて、種々の品御用になり、臣下にも賜ふとぞ。

○管内侍某といふ官女あり。光格上皇の寵幸を得て既に御妊身となりたり。然るに上首の嫉妬の為に、御産後間もなく怨恨を含みながら没せらる。其後深更に及べば、折々奥の廊にて其姿の現れたるを見たとぞ。仁孝、孝明の新誕の宮方、御二つ三つの時、皆同じ御病症にて薨去なれり。皆この管内侍の死霊の態なりとて追善又は祈禱の事を尽されども其功なしとぞ。

○局方の御妊身にて御着帯になれば、其日より里許に下り、御産の事を遂られ、新誕の宮は其里許へ預けらる。是は御内儀の御沙汰なれば、用途の事に何も長橋局の困却する事とぞ。

○孝明の朝に、宮女里許にて御産の事不都合なるより、幕府へ仰立られ、恭礼門院の旧地に御産殿を新造せらる。一度も御用なくして中川宮〔割註〕久邇宮也。に賜へり。

○典侍は大中納言を経歴したる羽林家、又は名家より召出さる。内侍は二位三位又は殿上人の女を召出さる。此内第一を長橋といふ。命婦藏人は加茂、日吉、松尾、春日などの、三位を経たる社司の女なり。此内第一を伊予と名付く。大外記、又は官務〔割註〕兩局といふ。の女に限れり。御差は官方撰家の諸大夫の女也。御末位階ある人の女なり。上首を一采女、二采女、三采女といふ。女孺は無位の人の女也。御物仕も同じ。御物仕は長橋の侍女の如し。